



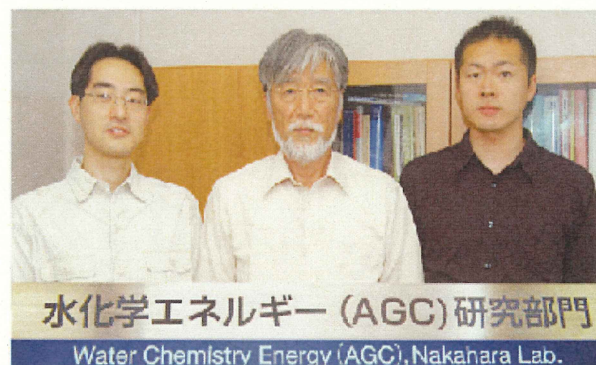
京都大学化学研究所 広報誌 黄檗、2009年6月

寄附研究部門

「水化学エネルギー (AGC)」の設置 ギ酸 (HCOOH) の熱反応の応用

2009年4月1日 客員教授 中原 勝 特定助教 辻野 康夫

平成21年4月1日より、旭硝子株式会社(AGC)から社会貢献の一環として京都大学化学研究所に寄付された水化学エネルギー(AGC)「Water Chemistry Energy(AGC)」研究部門がスタートした。スタッフは中原勝(客員教授)、辻野康夫(特任助教)、田中俊幸(受託研究員)である。設置の趣旨は、水の物性と反応に関する基礎研究を、我が国の科学技術の発展に結びつける架け橋をつくることである。資源不足の状況に科学の力を生かす試行である。化石燃料にエネルギー源を強く依存する現代文明は、京都議定書(1997年)に従って気候変動を起こす懸念のある温室効果ガス・二酸化炭素の放出を削減しなければ、地球環境の危機に直面する可能性がある。燃焼



▲ 左から辻野特定助教、中原客員教授、田中受託研究員(AGC) ▲ 京都新聞の見出しとして水となり二酸化炭素を放出しない、クリーン水素エネルギーの生成サイクルを研究することは、地球との調和のために社会と学術研究を発展させることに役立つ。二酸化炭素を水素とカップリングさせて室温で安定な液体ギ酸に固定化・貯蔵し、水素を貯蔵する化学タンクの役割を果たすギ酸を人工燃料として使用する方法の確立を目指している。上の見出し記事で3月31日の京都新聞に、また6月3日には日経産業新聞誌面にて紹介された。(水化学エネルギー 客員教授 中原 勝)

水素エネルギー
推進へ講座開設
京大、旭硝子寄付で